



うのひろゆき
宇野宏幸

特別支援教育コーディネーターコース教授

発達障害のある子どもが
クラスにいる場合、
授業づくりにどのような
工夫が必要でしょうか。

特

別支援教育の観点から説明します。特別支援教育で大切にしていることは、子どもの学び方を考慮して、教え方を工夫することです。言い換えると、通常学級においても個の教育的ニーズを踏まえた教育の在り方を提案していることとなります。

通常学級では、支援対象の子どもとクラス全体のニーズの調和を常に考えておく必要があります。発達障害の子どもにも考慮した授業は、他の子どもにとっても分かりやすく楽しく、満足度の高いものになるはずですが、また、発達障害の子どもは他の子ども以上に、できたという成功体験や先生からの承認を求めていることも認識しておきましょう。AD/H/D(注意欠陥/多動性障害)の子どもは、授業中に教室を飛び出してしまっ



立ち歩きが多い、始終しゃべっているといったことが目立つかもしれません。これは彼らの持っているニーズのサインです。まずは、教員に合図してから外に出るなどの約束をすることになるかもしれませんが、約束が守れたら「褒める」チャンスです。

私たちは、注意力にも課題を持っています。特に見えるものや音の刺激があると、教員の話が頭に入らないので、できるだけシンプルな教室環境にします。彼らの注意を引きつけるため、ICT機器などを活用してテンポ良く視覚提示をしてみましよう。フラッシュカードも効果的です。このような工夫によって多動も目立たなくなるはずですが、ぜひ、明日からの授業づくりに取り入れてみてください。

キャンパストピックス

CAMPUS TOPICS

↓数人がかりで倒れた墓石を元に戻した



私たち震災のことを伝えられたらと思います」と語った。今後も、兵庫教育大学では学生ボランティアや臨床心理士チームを派遣するなど、継続的な支援活動に取り組んでいく。

↓夏休み学習会では子どもが持参した課題などを指導



**東日本大震災の被災地で
学生有志が
支援活動**

大学の学生ボランティア派遣に応じた学生25人は8月8日からの5日間、宮城県石巻市でさまざまな支援活動をした。9日と10日は、横浜市の教員とともに小中学生向けの夏休み学習会を訪問。宿題などを指導し、小学1年生には紙芝居の読み聞かせもした。学習会の後は、現地の教員から震災の体験談を聞き、横浜市の教員と今回の活動についてリフレクションと意見交換を行った。

11日は牡鹿半島の南端、牡鹿地区へ。傾斜地の墓地で清掃や墓石の立て直しに汗を流した。大人が数人がかりでもなかなか動かせない墓石があらうこちらに転がっていて、学生たちは震災のすさまじさをあらためて実感。盆を直前に控え、地元の人から多くの感謝の言葉を聞いた。

学生たちは被災地に入る前は「精神的にシヨックを受けている子にどう接すればいいか」と少し構えたところがあったようだが、元気な子どもたちの様子に少しは安心したようだ。和田守拓馬さん(幼年教育系コース4年)は「被災地の雰囲気や臭いなど、実際に来てみなければ分からないことが多々ありました。倒壊した建物もテレビで見ると訴えかけてくるものがあるように感じました。いつか私の言葉で子どもたちに震災のことを伝えられたらと思います」と語った。



牡鹿地区での支援活動を終えた学生たち